

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.364

2015

9

隔月刊



学外活動を通して、コミュニティで活躍できる人材を育成（跡見学園女子大学）

特集 特徴ある正課外教育で学生を教育する

座談会 4年制私立大学における看護師養成の未来

小特集 エコキャンパスの今

特別連載 高校は今～これからの高大接続・連携を考える（横浜市編）

明日への試み 追手門学院大学

わが大学史の一場面 仙台白百合女子大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 獨協大学／立正大学／大正大学

クローズアップ・インタビュー

アテネ・北京オリンピック トランポリン日本代表、阪南大学職員 廣田 遥さん

日本私立大学連盟



しかけ本「Great Exhibition of Works of Industry」



「超アナログ！でも3D？のぞきこみシアター」を
子どもがのぞきこむ様子





学園創立140周年・大学開学50周年 新学部を設置し、新たなステージへ

創立者・跡見花蹊は、「新時代に後れをとらぬ女子の教育こそ、教育家として努力すべき道である」という考えのもと、1875（明治8）年に「跡見学校」を開校。日本の誇る伝統文化を踏まえ、豊かな教養と自由な精神をもつ自立した女性の育成をめざしました。その後、1965（昭和40）年には「跡見学園女子大学」を設置。2015（平成27）年、学園創立140周年、大学開学50周年を迎えました。そして、この節目となる年に向けて、地方創生という社会のニーズを捉えた「観光コミュニティ学部」を新設しました。これからも創立者の思いを受け継ぐとともに、更なる発展に向けて改革を進めてまいります。

学園創立140周年、大学開学50周年に向けた取り組み

● 観光コミュニティ学部の新設

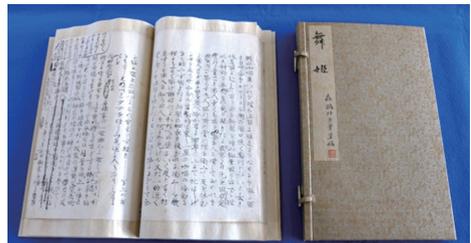
“観光とコミュニティ”をキーワードに、地域の振興に寄与する人材を養成するための学部です。いまだ顕在化していない新たな需要を掘り起こし、これからの社会に必要な人材を育成します。観光デザイン学科とコミュニティデザイン学科の2学科で構成されています。

● 旧伊勢屋質店の取得

明治時代の作家・樋口一葉ゆかりの歴史的建造物・旧伊勢屋質店を跡見学園が取得。明治時代の貴重な文化財の維持・保存を図るとともに、教育施設としての活用や、東京都文京区との地域連携事業、一般公開などを行う予定です。

● 森鷗外「舞姫」自筆原稿を取得

森鷗外の小説で、文学的歴史的価値の高い「舞姫」の自筆原稿を取得。教育的活用はもとより、地域住民への公開などで、東京都文京区と連携し、学術的な貢献に活かしていきます。



地域社会の構造が大きく変化する時代に コミュニティづくりに取り組む



学生も参加して開催された介護予防体操教室

跡見学園女子大学では、東京都文京区と連携し、高齢者と学生の世代間交流・健康地域づくりの場、「シニアプラザ事業」を展開しています。学生から高齢者への一方のボランティアだけではなく、双方の交流を通じて学生の教育の実践や新たな学びの機会となることも意図しています。介護予防体操教室、健康まちあるき、パソコン講座など、さまざまな活動や交流を実践し、高齢になっても心身ともに元気に過ごせる地域づくりをめざしています。

このほかにも、災害時の母子救護所の設置、警察と連携した防犯対策、生涯学習プログラムの実施など、さまざまな連携活動を実施し、コミュニティづくりに寄与しています。



学生は、自らが考案した散策コースを案内

跡見学園女子大学

社会のグローバル化に対応し 国際交流展開を拡充する



英国国立スターリング大学での海外語学研修

跡見学園女子大学では、社会のグローバル化に対応し、国際交流事業に力を注いでいます。海外研修先を増やしたり、日常的に英語に接する機会を提供したりするなど、学生が積極的に学べる環境を整備しています。海外研修については、語学力向上を目的とする研修だけでなく、海外での社会活動体験や諸外国の地域コミュニティを学ぶ研修など、外国語で学ぶ研修を増やしています。また、ネイティブの教員と学生が自由に会話できる「跡見英会話サロン」を開設し、日常的に生きた英語に接する機会を提供。海外研修前の準備、英語力の維持など、さまざまな目的で活用されています。



ネイティブの教員から生きた英語が学べる

学生寮を新設、共同生活を通し コミュニケーション能力と自律心の涵養を図る



文京キャンパスから徒歩圏内に建築された新学生寮

跡見学園女子大学は、2015（平成27）年に新学生寮を開設しました。これにより、学生の通学・学修・就職活動を行う上での利便性が向上しました。近隣警察署の協力体制や防犯カメラ設置による安全な環境、栄養バランスのとれた食事提供、引きこもり防止対策など、安全・安心で健康的な規則正しい学生生活を送れる環境を整備しています。また、寮生が企画するイベントの開催や共用スペースの充実により、年次を問わない交流を促しています。共同生活を通し、企業でも求められるコミュニケーション能力や社会人として生活するための自律心を養うことができます。



共用スペースを充実させ、交流を促進

跡見学園女子大学

大学時報

No.364

2015.9



愚直に伝統を守り、 果敢に挑戦する

山田 徹雄

● 跡見学園常務理事、跡見学園女子大学学長

学園創立以来140年という伝統ある私学であるからこそ、革新を怠らない姿勢を、跡見学園女子大学は貫いてきた。

教養と実践力を備えたバランスある社会人を育成するために、茶道・華道・香道などが固有の文化を教育課程に収める一方で、ポップカルチャー、コミュニティビジネスなど最先端の学問分野をも射程に入れる努力をしてきた。

学生も教職員も、視野狭窄に陥らないよう、大学という小宇宙を越えて広い視野を持つための活動を行っている。

改革の先にあるもの

規矩 大義 ● 関東学院大学学長

1 改革し続けているという安堵感

「改革」という言葉には、とても力強い響きがある。いまや、「改革こそが大学の生き残る道」、「改革の手を緩めることは高等教育の場からの退場を意味する」と言わなければならない。もちろん、それを真っ向から否定するつもりなどない。大学である企業であれ、どのような組織であっても常に変化のなかで発展していることは理解している。

少年野球でも、両足の踵をぺたっと地面につけて微動だにせずにボールが飛んで来るのを待つ子どもは、お世辞にも上手な守備はできないが、足を前後左右にずらして踵を浮かし、少し身体を動かしながら捕球体勢をとっている子どもは、イレギュラーバウンドにもうまく対応できる。ただし、本当に優れ

た選手は無駄に身体を動かしたりはしない。相手打者の動きを見ながら、自分のリズムで小刻みにタイミングを計っている。大学改革を少年野球の守備に例えてしまった非礼を、どうかお許しいただきたい。

例えば、新しいグローブや新しいバットを使ったからといって野球が上達するわけではない。百歩譲って、最新機能を備えたピッチングマシンを使えば打撃技術は向上するかもしれないが、少年野球で球速150キロの球を打つ練習を行っても、多くの子どもにとって野球は面白くないものになってしまっているのではないだろうか。面白くない、つまらないと感じる理由も、子どもによってさまざまである。球が速すぎてバットに当たらないからなのか、仮にバットに当たっても非力で前に飛ばないからなのか。本物の投手の生きた球でないと練習にならないという実

力派の子どももいるであろうし、打つ球種を自分で選べないと強がる子どももいるだろう。

プロ野球をめざす子どもを多く抱えたチームの指導者は、高価なピッチングマシンを望むかもしれないが、野球をする楽しさを味わうことから取り組んでいるチームも間違いなくある。どちらのチームの子どもたちの顔も、生き生きしていることを望みたい。それでも、高価なピッチングマシンが店頭に並べば、ましてや期間限定で売り場の前に行列ができていたとすれば、誰もが出遅れてはいけなくと購入し、まだ梱包されたままのマシンを見て安堵するのであろうか。野球の例えはここまでとしたい。

2 改革の固定化

少子化の問題だけにとどまらず、大学を取り巻く環境は大きく、そして激しく変化している。これからの厳しい時代に高等教育機関として生き残り、さらには発展させてゆくために、どの大学も必死に改革に取り組んでいる。ある大学関係者から、「改組や機構改革を含んだ、目に見える変化を示し続けなければ、受験生や保護者から改革に後ろ向きの大学だ

と思われてしまう」という声を聞いたことがある。「改革の歩みを止めてはならない」と、彼は続けた。その気持ちは痛いほど分かる。

改革を後押しする施策も目白押しである。「スパーグローバル大学創成支援」や「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」といった大型補助事業はもちろんだが、私立大学等改革総合支援事業のように、一般に優れた取り組みといわれる改革手法（評価項目）が提示され、各大学の取り組み状況を競わせ、その評価に応じて助成という形でさらなる後押しをする制度もある。もちろん、この制度に随分と助けられることもある。

一方で、各評価項目のハードルの高さはまちまちであるため、大学の特徴や特性、志向とはまったく切り離されて、配点の高い評価項目に努力の力点が置かれる。また、達成が容易な項目から順にクリアされてゆくことになる。結果として、政策上の改革の方向が固定化され、どの大学も同じような目標に向けて邁進しなければならぬというジレンマに陥る。大学は淘汰の時代を迎えている。ほかの業界と同様に、大学行政も護送船団方式でないことは自明なの

に、どの大学も特徴を乏しく、どこを切っても同じ金太郎飴のような大学をめざすとすれば、今の相対的な位置関係は決して変わることはないのである。

私立大学はどこも、「建学の精神」「建学の理念」が存在し、それが各大学の特徴と人材育成像に反映されているはずである。それぞれが長く持ち続けてきた伝統の上に、独自の尺度で新しい特徴を積み重ねてゆくことを見失っては私立大学の存在意義はない。大学運営で「選択と集中」という言葉がよく使われるが、改革の方向性と具体的な施策こそ、十分に吟味し、選択と集中が必要なのである。

3 改革の真の目的

大学改革の真の目的とは何であろう。もちろん、ステークホルダーによっても目的は異なるであろうし、大学そのものが持続できなければ何の意味もないうことは十分に自覚した上で、経営という観点から少し離れ、教職員の立場として青臭い表現を許していただけるならば、「教職員が何の憂いもなく、学生の成長を心から望み、教育の質向上に存分に力を発揮し、地域社会とともに学生を巻き込んだ研究や教

育に邁進することができると、そんな環境を望むが故に改革を行っているのだと信じた。そのために、安定した大学運営や大学経営が必要とされているのだとすれば納得できよう。だから、改革とは決して新しいことに取り組み、新機軸を打ち出してゆくだけではなく、本学の学生にとって必要なことは何かを問い続け、われわれ自身が納得して変わってゆくこと、何より日常の教育の質向上のために、改善を繰り返すことが改革の重要な要素だと考えている。「改革」という強い言葉に対して「改善」は幾分控えめに捉えられるかもしれないが、決してそうではない。日々の改善は、そのまま目の前の学生に直ぐに生かされ、結果を目の当たりにすることができるからである。

大学改革はとて大きな目標なので、つい遠くの目標を見つめがちである。それに向けた具体的な行動が求められているのだが、われわれの目の前には常に学生がいて、その学生にとっての教師は唯一、われわれだけだということをお忘れてはならない。長期ビジョンの対象となる将来の学生ではなく、今の彼ら、彼女らにとって教師はわれわれだけである。

代わりの師はいない。だからこそ、教職員一人ひとりが、学生の未来に大きな影響を与える存在であることを常に心に留めて行動する責任があるのである。

新しい教育方法の取り組みも改革の具体策やグローバル施策も、目の前の学生に浸透し、直接影響を与え得るものでなければ、その効果は限られている。学生への迎合や妥協ではない。新しい教育システムであろうが、従来からの教育手法であろうが、フェイストウフェイスの関係から生まれるものにこそ魂がこもるのである。

4 選択と集中

ところで私は、大学院修了後、出身とは異なる大学の助手を経て民間に転じ、13年前に縁あって本学工学部にお世話になった、企業出身の教員である。奉職1年目の教授会の議題の中心は、学科改組の問題であった。「入試状況を鑑みて、学科を統廃合すべきである」という強硬論が改革派、「まずは教育改革から始めよう」という意見は改革抵抗派といった、激しい議論もあったかと思う。

企業では部署の統廃合やスクラップアンドビルド

は常であるし、そうした環境に私自身もいたが、先に触れた「選択と集中」を大学の教学組織でも断行するのかと、いささか驚いたことを覚えている。

少しばかり形態は変わったものの、結果的に大きな統廃合には至らなかつたが、それから10年の間に、一部の資格系学部・学科を除いて、人文科学系も社会科学系も自然科学・工学系も、ほとんど全ての学部・学科が一度は入試で苦戦を経験することになった。10年で、経済と社会のサイクルが1回転したかのようであつた。

経営サイドから見れば、動きが遅く、非効率で認識が甘いと言われるかもしれない。企業の発想に立てば、社会のニーズに合わせて組織を統廃合し、効率的な経営を行うことは至極当然である。新しく設けられた部署に配属された社員は意気揚々と職務に取り組み、成果を上げ、組織は活性化化する。しかし、大学で企業並みのスクラップアンドビルドは可能であろうか。技術論では可能だろうが、本当に有効に機能するかは疑わしいと私は思っている。

大学を企業に例えるなら、入口における顧客は学生である。では、商品は何だろうか。決して、しゃ

れたカフェテリアや豪華な建物ではない。就職率や公務員試験の合格者数でもない。最大の売りにすべきは教職員である。特に、教員は個々に専門性を持ったスペシャリストである。時代のニーズに合わせて専門性を若干シフトできるような柔軟性があれば理想的なのかもしれないが、その確固たる専門性の高さに期待するからこそ、学生の教育と研究を託しているのである。

大学が目の前（目の前の）学生をしつかり見据えて、人々との関係のなかで教育しようと考えているのと同じく、教員個々の専門性を尊重し、教育者、研究者としての尊厳を守ろうとしなければ大学教育は成り立たない。教員が、教育にも研究にもプライドと自信を持って取り組んでいるからこそ、学生との間に真の師弟関係が生まれるし、教育の効果も高まるのである。今話題のアクティブ・ラーニングやPBL（Project Based Learning）などでも、その仕掛けをする教員に絶対的な自信があるからこそ成立する教授法ではないだろうか。

「来年から、異なる学部（学部の）学生に、あなたの専門分野とは少し異なる科目を教えてください」。こう言わ

れたら、おそらく大学教員の能力をもってすれば講義を行うことは可能であろう。しかし、新しい職場で過去の経験を生かし、さらなる能力を発揮する企業の社員と比べて、能力を発揮するシチュエーションが異なるのである。一定以上のスキルを持った人間が、シラバスに従って最新の教授法を用いて教えるれば学生の成長を約束できるというのなら、ICT（情報通信技術）を用いたバーチャルな教育環境で十分なはずである。しかし、そこからは陶冶や薫陶といった言葉は生まれてこない。

批判されがちな大学教員の現状維持論を擁護しているのではない。教員の教育や研究に対するモチベーションが高いほうが、はるかに効率が良いことは誰の目にも明らかである。この大きな能力を最も効率的に発揮できる環境を用意するのも大学の役割であり、そこに学ぶ学生にも資するのである。

それ故に、自発的な組織再編は積極的に進めてもよいが、時代の変化に呼応した組織再編は、時間を掛けてじっくりと行うべきだと私は考えている。

今、追い風が吹いている学問分野にも必ず波が来る。今、逆風が吹いていたとしても、不要だと断言

できる学問分野などない。時代によって必ず浮き沈みがある。そのときに強者が弱者を隅に追いやるような学内行政は好まない。代わりに、防災の標語ではないが「自助・共助・公助」の精神で、風向きが悪いときは自助努力をより一層お願いする。それを強い分野がサポートし、大学を主体としても支援する。採算性をベースにした学部学科の統廃合に対して、「選択と集中」を唱えることは誰でもできる。学内の資源をどのように活用して浮沈の幅を小さくするのかが大切だと思う。そのような大学運営をめざす学長は甘いと言われるであろうか。

5 伝統の重み

少し個人的な話になるが、よく大学の学部・学科名称の種類が多さが話題になることがある。志願者の減少に応じて学部・学科名称を改める動きも、まだ続いている。私が専門とする土木分野でも、全国的に志願者が減少した時期に、「土木」という言葉の持つイメージや語感が悪いという理由から多くの大学が一斉に名称変更を行い、本学を含め、イメージ先行の名称を名乗るようになった。その結果、別の

問題を抱えることになった。

あくまで私見だが、大学から「土木」という名称が一斉に消えた途端に、高校生だけでなく、一般の人々や教育界、産業界からも「土木」という学問分野（職業分野ではなく）が想起されなくなったのではない。少し大きな書店で専門書の棚を探しても、「土木」というコーナーが見つからないことさえある。本学でも、はつきりとした職業観をもって入学する学生の割合が減り、導入教育で大変苦労した思いが強い。これから高等教育を受けようとする若い世代の裾野が広がらなければ、大学での専門教育はもろろんのこと、その業界の維持・発展も見込めないであろう。

本学では、3年前に名称を「土木」に戻した。入試戦略としての成否は別として、土木分野に興味を抱き、学びたいと思つて入学して来る学生が圧倒的に増えたことは間違いない。

表面的なことに惑わされず、堅持しなければならぬものは堅持し、その上に新しい特徴を積み重ねるのでなければ、大学をはじめ、どのような組織においてもそれを維持させることは難しいと感じている。